

演題番号：A5

犬の裂孔性網膜剥離に対する網膜硝子体手術の術中合併症に関する検討

○福本真也, 長崎鉄平

グラン動物病院

1. はじめに：犬の裂孔性網膜剥離は進行すると視神経乳頭のみで附着する全剥離へと進行して失明に至る。網膜硝子体手術は犬の裂孔性網膜剥離に対する唯一の治療法であるが術式は確立されておらず、術中合併症に関する報告はほとんど見当たらない。今回、犬の裂孔性網膜剥離 55 眼に対して 25 ゲージ小切開網膜硝子体手術を行い、術中に発生した合併症について検討した。

2. 材料および方法：症例は 14 犬種 54 頭 55 眼、平均年齢は 7.5 歳 (0.8-14.3 歳)。網膜剥離の発症原因は白内障手術後が 27 眼、水晶体嚢内摘出後が 1 眼、硝子体変性が 25 眼、白内障の進行によるものが 2 眼であった。手術手技は水晶体手術後、必要に応じて眼球を突出させ、3-4 か所の強膜にカニューラを設置し、その 1 つにインフュージョンカニューラ (IC) を接続して眼内灌流液にて眼圧を調節しながら硝子体を切除した。次に液体パーフルオロカーボン (PF) によって後極部より網膜を復位させ、可能な限り PF を除去しながらシリコンオイル (SiO) で硝子体腔を置換した。症例によっては半導体レーザーによる網膜の光凝固を行った。全例の手術手技を録画保存し、術中に発生した合併症について検証した。

3. 成績：術中に発生した合併症は、カニューラ設置時の眼内出血が 3 眼で、いずれも眼内の洗浄により手術遂行可能であった。IC 脱落による眼球虚脱が 2 眼で、IC の縫合固定により脱落防止可能であった。多くの症例でカニューラ抜去時に強膜からの出血がみられ、適宜無処置、縫合、焼烙により対応したが、縫合結紮したにもかかわらず出血が眼内に及んだものが 3 眼であった。剥離した網膜が重度に収縮癒着し、復位できなかったのが 2 眼で、これらは手術適応外であったと考えられる。網膜復位後、硝子体腔に充填させた SiO が前房に漏出したのは 12 眼で、前房洗浄によって除去したが漏出が止まらず、手術終了時に前房に SiO が残留したのが 7 眼であった。復位させた網膜が重度に浮腫を起こしたのが 2 眼、医原性の網膜裂孔が形成されたのが 4 眼であり、いずれも剥離した網膜を操作する際の影響と思われた。

4. 結論：犬の裂孔性網膜剥離に対して網膜硝子体手術を実施する際は手術適応を見極め、より安全に手術できるよう、術中に起こりうる合併症を事前に予防し、合併症が発生してしまった場合は対処できるよう準備しておくことが重要である。